パルシステムの目指す日本型畜産

２０１３年３月２３日

パルシステム生活協同組合連合会産直推進部
部長　高橋　宏通

パルシステムの目指す日本型畜産

（2012年度第9回飼料米普及意見交換会資料）

1.地域の資源循環を行い、国産自給飼料の活用を進めます。

2.動物の生きる環境に配慮し、薬剤に頼らず健康に育てます。

3.食と農をつなぎ、「いのち」と「環境」を守ります。

■パルシステムが目指す畜産

「食料自給」「環境保全」「食の安全」「食の豊かさ」を実現するために、国内の生産者と提携して、持続可能な日本型畜産モデルの推進に取組みます。

①地域の資源循環に配慮し、国産自給飼料の活用を進めます。

②動物の生きる環境に配慮し、薬剤に頼らず健康に育てます。

③「食」と「農」をつなぎ、「いのち」と「環境」を守ります。

薬剤使用量の減少　⇒　環境保全・食の安全

健康な家畜の生産　⇒　食の豊かさ

＊パルシステム産直の強み

一般的な産直	生産者の顔が見えるから「安心」。→よく使われる表現 （生産者から消費者の顔は見えない）
パルシステムの産直	生産者の顔が見えるのは当たり前。 生産者の考え方や、生産方法が分かるから「安心」。 生産者から消費者の顔が見えているので、生産者は「安全」で「美味しい」ものを作る義務を背負って努力を続けられる。（売りっぱなしでは通用しない仕組み・生産者の努力が報いられる仕組み） 消費者も生産者のことを理解することができるので、自らの消費行動によって、生産に関わる「課題解決」や「前向きな取り組み」を生産者と協同して進めることが可能。

パルシステムの産直は、生産・加工流通・消費が一方通行ではなく、一体となっていることが強み

＊抗菌性飼料添加物の使用実態（比較表）

＜牛肉＞　ホルスタイン去勢牛　　出荷：約20ヶ月齢

一般	出荷まで	
パル	約7～10ヵ月齢まで	（不使用）

＜豚肉＞　　出荷：約180日齢

一般	体重約70kgまで	（不使用）
パル	体重約70kgまで（できる限り不使用）	（不使用）

＜鶏肉＞　ブロイラー　　出荷：約50日齢

一般	出荷の約7日前まで	（不使用）
パル	（不使用）	

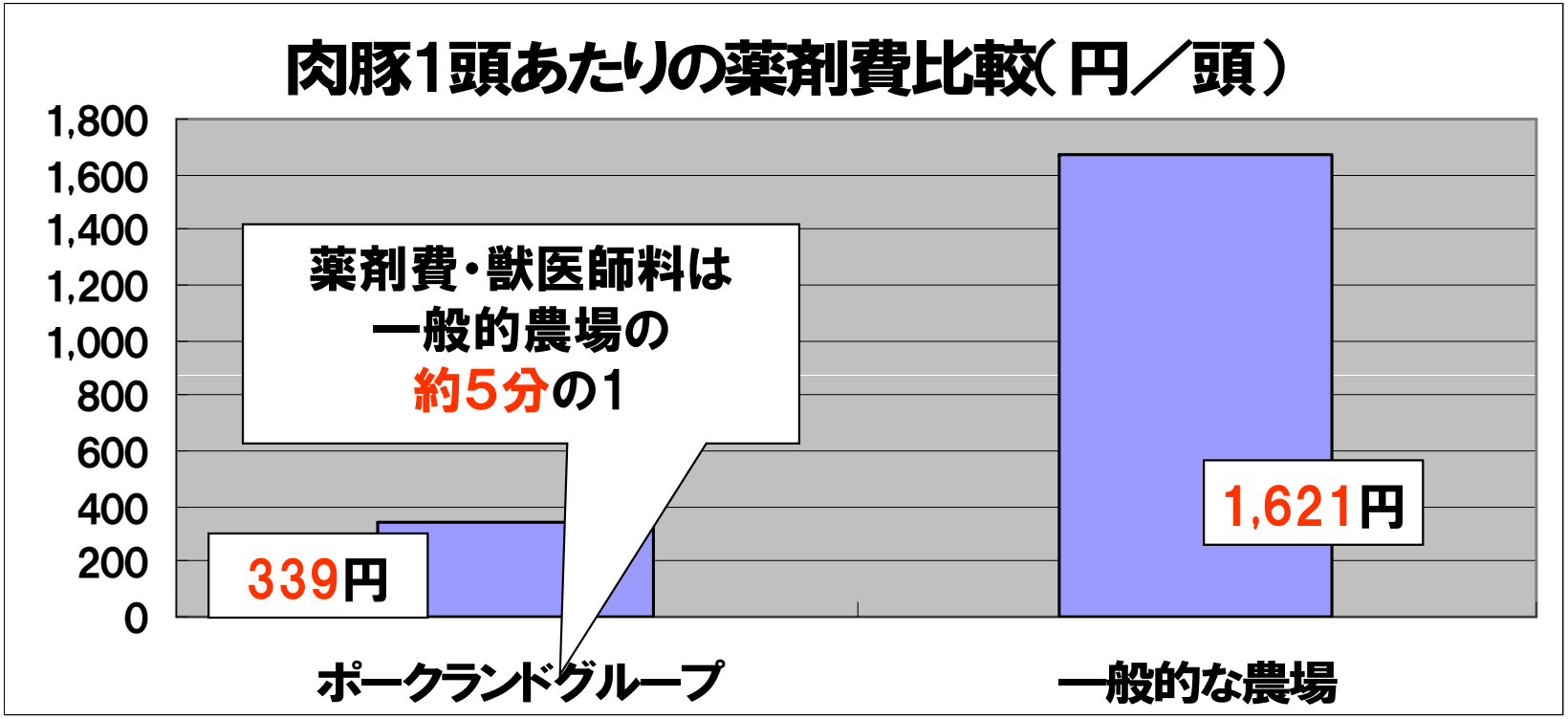
＜表の見方＞

※上記表の「パル」は産直産地の標準的飼養を表す

赤	抗菌性物質を飼料添加している期間
青	抗菌性物質を飼料添加していない期間
黄	抗菌性物質の飼料添加をできる限りしない期間（産地や時期によって異なる）※

※豚の成育状況などを見ながら、できる限り抗菌性物質を飼料添加をしないように、各産地で努力を続けています。

＊産直産地のひとつ「ポークランドグループ」の薬剤費・獣医師料



※ポークランドグループ：H20年度の平均実績（項目：獣医師料及び医薬品費）
※一般的な養豚農場：農林水産省ホームページ掲示の農林水産統計「H20年度肥育豚生産費」の肥育豚1頭あたりの生産費より引用（項目：獣医師料及び医薬品費、豚飼養頭数規模2000頭）

家畜のストレスを軽減して免疫力を上げることや、外部からの病気の侵入を抑えることなどが、「健康な家畜を育てること」や「薬剤に依存しない生産」に繋がります。

＊「健康な家畜の生産」と「安心・安全で美味しい肉」との深い関係

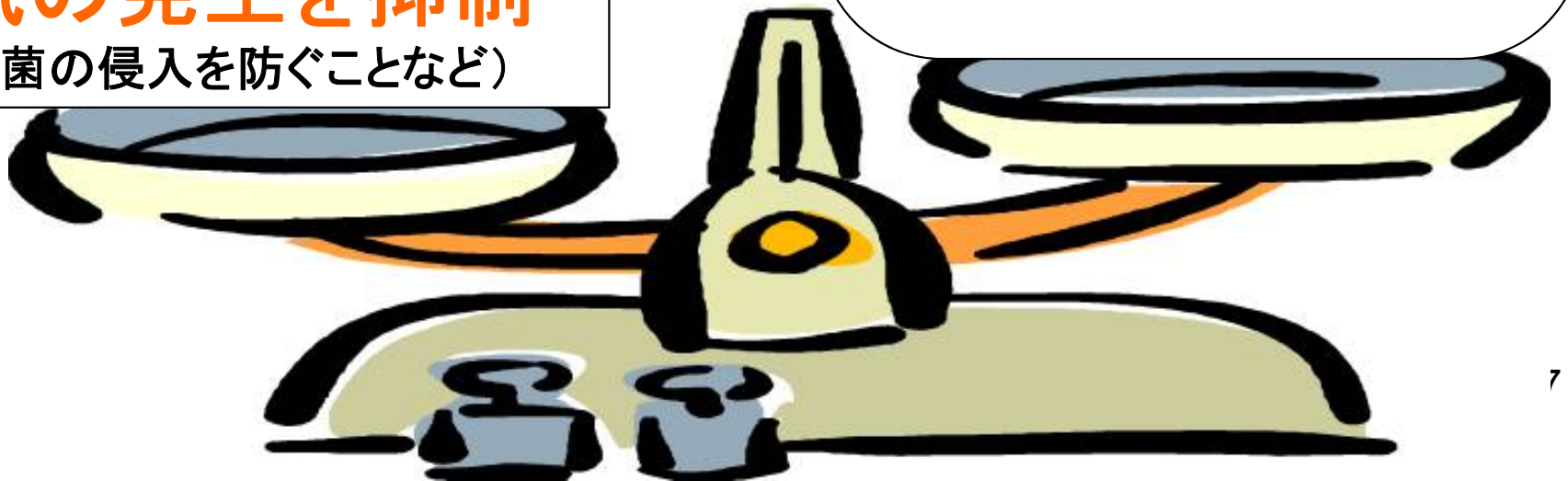
飼養環境を整えることなどで
家畜のストレスを軽減
（免疫力を高めて疾病リスクを軽減）

病気の発生を抑えることで
薬剤の使用を削減
（予防や治療が減ることなど）

衛生環境を整えることなどで
病気の発生を抑制
（病原菌の侵入を防ぐことなど）

ストレスを軽減して健康に育てた
美味しい肉
（ストレスなく育てた肉は美味しい）

病気の発生を抑えて健康に育てた
できる限り薬剤に頼らずに育てた
安全・安心な肉
（薬剤の残留がない安全・安心な肉）



Ⅱ パルシステムにおける
耕畜連携の推進

【耕畜連携会議の目的】

- パルシステム100万人の食づくり運動と連動して食料自給率向上の取り組みを推進します。
- パルシステムと提携している畜産生産者と耕種生産者がより連携を深め、地域資源循環型農業を推進します。
- 畜産産地においては、飼料米をはじめとし自給飼料の導入を積極的に進めます。
- 耕種産地においては、畜糞等の堆肥資源の有効活用を推進します。
- 畜産、耕種農家が持っている資源を有効活用し、物語のある商品開発を目指します。

（1）.耕畜連携会議当面の事業

*耕種農家、畜産農家、林業、水産業等の連携による地域資源循環モデルの耕畜

*遊休農地、耕作放棄地の有効活用

*畜産産地の畜糞等の有効活用　エコチャレンジ栽培の拡大

*地域の産業クラスターの形成による商品開発

*こめ豚、こめ鶏、こめたまごの拡大と普及

（2）耕畜連携会議の組織つくり（全体会議とそのもとの地域推進組織）

＊ 耕畜連携会議（岩手、秋田、千葉、山形、九州）

参加対象団体
＊ 岩手県：十文字チキン・JA新いわて・全農岩手県本部
＊ 秋田県：ポークランドグループ・JAかづの・全農秋田県本部
＊ 千葉県：北見畜産・旭サンドファーム・
＊ 福岡県：すすき農場・JA八女
＊ 山形県：米沢郷

＊ 全農チキン・全農ミート・北日本くみあい飼料・全農営農対策部
茨城でも立ち上げの要望
コアフードの地鶏軍鶏、有機農業ギルド、を中心とした連携

耕畜連携会議の重点課題:

自給飼料をめぐる情勢と今後のありかた

（水田利活用自給力向上事業の補助金がなくても推進できる仕組みつくり）

・飼料の流通の仕組みづくりと研究　飼料コストの引き下げ

・遊休農地を活用した農産物の売り場の確保

【今後の自給飼料の進め方について】

（1）.畜種ごとに自給率目標の設定とそれにむけたチャレンジ

- 消費者にとって、パルの肉、鶏卵を食べることで食料自給率向上に寄与できるようにする。現在の到達点をきちんと情報公開できるようにする。
- 輸入穀物争奪戦、飼料高騰に対する対応。
- 自給飼料の消化率、飼料要求率のレベルアップ。
- 「良質な飼料を低コストで産地に」

（2）自給自給率をあげるための方策

- 飼料米、飼料稲などの導入。⇒補助金制度との見合い。米の消化率のアップ。
- 配合飼料における、飼料メーカでの置き換え。飼料メーカの設計段階で可能なレベルのおきかえ
- エコ・フィード、未利用資源の活用。
- それぞれについて可能性、課題を検証。

1.【パルシステム耕畜連携会議】毎年1回開催

- パルシステムの掲げる日本型畜産を実現するために、耕種農家と畜産生産者が協力し地域の有効活用を勧める目的で設立した会議で、毎年各産地の進捗状況や成果、課題を共有化して次年度につなげていきます。
- パルシステム連合会の耕畜連携における取組みについて連合会高橋①耕畜連携会議の目的②パルシステムの日本型畜産の推進③自給飼料の利用推進及び国産飼料の生産拡大と流通における研究などの取り組み総括を報告しました。
- 事前に産地アンケートを行い集約の結果（１６団体）をまとめたところ、鶏卵、豚肉、牛肉、鶏肉それぞれで、輸入配合飼料の依存から飼料米を中心にした自給率向上に取組みが進んでいること、飼育環境にも配慮がされストレスを軽減する取組が行われていることが確認されました。
- 飼料流通研究プロジェクト活動経緯報告：全農の横山氏から東日本大震災の影響で活動停止していた飼料流通研究プロジェクトの報告がされました。プロジェクトは飼料米をはじめとした自給飼料活用にむけて流通の仕組を理解し、コストや物の流れを把握することで新しい飼料流通の流れを具体的に作る活動に取り組んでいます。
- 「自給飼料をめぐる情勢と今後について」独立行政法人　農畜産業振興各地域での耕畜連携の実践報告を次の産地様からいただきました。①北海道：ノーザンビーフ協議会②秋田県：ポークランドグループ③岩手県：軽米町④山形県：米沢郷牧場⑤茨城県：JAやさと⑥千葉県：首都圏とんトン協議会⑦神奈川県：神奈川中央養鶏⑧福岡県：薄牧場　各産地ともに積極的な取組を行っています。報告の中で特徴的だったのは「自給飼料の取組を行うことは重要であると感じているからこそ実施している。しかし更に重要なのは「継続」することだと考える。これを産地と関係者の協力で行う必要がある。というコメントが出されました。

2.【飼料流通研究プロジェクト】

- 産地、生産者、全農、飼料米産地、飼料メーカ、パルシステム、パルミートで構成。
- 自給飼料の産直化を今後進めていく上取り組みを総括し今後の方向性を確認しました。
- 2011年度は、ポークランドで飼料米生産者から直接おこめをしいれ自前の飼料保管施設に貯蔵管理を行い給餌をおこないました。
- この取り組みのかげで震災直後の輸入飼料が枯渇したなか、豚に飼料米を給仕することが飢えをしのぐことができました。また、課題であった、夏場の保管におけるカビなどの品質劣化も問題なくクリアできることがわかりました。
- 一方、自前で配合したため、マッシュの状態で給仕したため、消化が悪い、糞が多くでるなど新たな課題が生じました。今後、加熱処理するなど、飼料要求率を低めるための研究をおこないます。
- 飼料米以外にも、地域にふんだんにある資源を飼料化できないか研究を進めていくことになりました。

ポークランドグループ公開確認会
２０１２年１１月７日・８日

- 総参加者数１８０名（パルシステムグループ２６名、来賓６０名、他産地等１３名、産地８１名）
- 対象品目：日本のこめ豚、会場：ホテル鹿角
- （1）パルシステム新農業委員会主催で畜産地のポークランドの公開確認会を開催しました。生協関係者、産地関係者総勢１８０名が参加しました。
- （2）今回の公開確認会は産地が推進する「日本型畜産」の到達点と成果を確認する目的で3年越しの開催となりました。当日、秋田県橋口副知事、川口衆議員、細越小坂町町長など多数の行政関係者が出席し挨拶をいただきました。
- （3）ポークランドグループでは、動物の健康に配慮し離乳期意向の抗生物質不使用で豚肉を生産しています。豚肉1頭当たりの薬剤日は全国平均の1／5を達成しています、またと場における内蔵廃棄率は非常に少ない値となっており薬にたよらず健康にそだてられていることがデータでも立証されています。
- （4）飼料米を活用したこめ豚は6年目をむかえています。飼料米の流通コストを削減する取り組み、飼料米を熱処理し消化率を上げる取り組みなど全国のこめ豚のなかでも先進的な取り組みを実践しています。
- （5）耕作放棄地を積極的に飼料米や野菜畑に復元し地域の農業振興に大きな役割をはたしています。豚がいきいきと運動し健やかに育つバイオベッドの取り組みには多くの監査人、消費者から高い評価を受けました。アニマルウエルフェアの視点でも全国の産地のトップレベルとなっています。農業の6次産業化、自然再生エネルギーの活用など常に新しいことにチャレンジしていることに注目を集めました。
- （7）他の畜産産地の出席が少なく、公開確認会は先進的な取り組みを他の産地にひろげていく絶好の機会ですが、それができないことが今後の課題となりました。

＊「美味しさ」に高評価！

2010食肉産業展（食肉通信社主催）の中で行われた「銘柄ポーク高感度コンテスト」で、パルシステム産直産地・ポークランドグループが優秀賞を受賞しました（出品した豚肉は「日本のこめ豚」と同じ飼養方法で育てたもの）。

他の銘柄豚との
食べ比べでも「美味しさ」に好評価！

ポークランドグループ代表

豊下勝彦さん→

パルシステム日本型畜産の創造（図）

＊パルシステムの肉を食べることで

世の中がこう変わる！

＜畜産＞

＊家畜糞尿を適切に発酵することで「土づくり」の基本となる良質な堆肥生産を広めます。

＊堆肥を有効活用することで自給飼料の生産など資源循環型生産の輪を広げます。

＜農産＞

＊堆肥を使って「土づくり」を進めることで、化学肥料に頼らない農産物の生産を広げます。

＜食料＞

＊健康に育った「美味しい肉」・「安全で安心して食べられる肉」を広げます。

＊土づくりに基づいた「美味しい農産物」・「安全で安心して食べられる農産物」を広げます。

＊輸入品に負けない品質の高い農畜産物を生産することで食料自給率を向上します。

＊こう変わる！「耕作放棄地」が「にんじん畑」に

豚の糞尿から良質な堆肥をつくり、これを利用した「野菜」や「飼料米」の生産を推し進めることで、耕作放棄地だった荒地が、どんどん畑や水田に変わってきています。

産業復興・雇用の創造・食料自給の向上につながります。

豚肉産直産地ポークランドの事例

耕作放棄地（荒地）

にんじん畑

＊こう変わる！輸入トウモロコシ使用量380t削減

飼料米の取組み（日本のこめ豚）

東京ドーム約18個分の面積で飼料米を生産（09年度）

輸入トウモロコシを減らすチャレンジ

→仕上期の飼料に米10%を配合することで、輸入トウモロコシの使用量を年間約380t削減（10年度）

地域農家との連携強化

→豚の糞尿から作った堆肥を地域で使用することや、水田から発生する稲わら・籾殻を豚舎の床材に使用するなど、地域の資源循環が大きく前進！

＊パルシステムからはじめる自給率の向上!!

【国内の畜産の自給率】

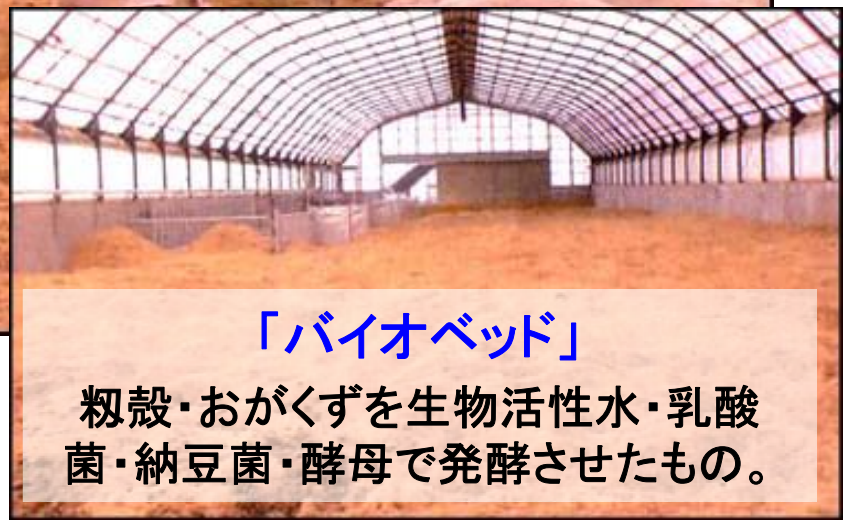
品目	品目 自給率	飼料 自給率	カロリー 自給率
牛乳・乳製品	69%	42%	29%
牛肉	39%	26%	10%
豚肉	53%	9．7%	5%
鶏肉	67%	9．7%	7%
鶏卵	96%	9．7%	9%
畜産物計	67%	24%	16%

飼料まで含めると「豚肉」の国内自給率（カロリーベース）は僅か5%しかない！！

＊健康に育てられた家畜は安全・安心・美味しい！

アニマルウエルフェアの取組み

家畜のストレスを軽減し、快適性に配慮した飼育を行っています。



→バイオベッドの微生物の働きで、豚の糞尿は自然に発酵が進み、臭いが抑えられます。また、コンクリートの床と違って、バイオベッドは穴を掘って遊ぶこともできるので、豚のストレス軽減にもなります。

☆ポークランドさん(秋田県)で飼料米が救世主となった事例

- ポークランドでは、年間８００tの飼料米を飼料に添加する予定で、一部を直接農家から買い上げ、保管施設の整備・破砕機等の購入を行い、11年度から飼料地域循環型の実験を行う予定で進めておりました。この事が被災後の飼料供給難に対し、救世主となった事を報告したいと思います。
- 震災発生時、在庫の配合飼料は300tありましたが、1日120tの資料を使用するため、2日分程度しかありません。電話、電気も遮断、何処とも連絡が取れず、その時点で最低1週間はエサの納品は無いと判断、種豚中心の給餌に切り替える事を決断。

  配合飼料の給餌量を通常の3分の1の４０t、飼料米1日２０tで対応する事としました。
- 通常使用量の５０％での対応は、3月１９日まで続きました。
- 震災から1カ月後になって、飼料は新潟、群馬、九州ルートで届くようになりましたが、確保できている量は1日８０tで、残り４０tは飼料米に頼る状況は変わりませんでした。
  使用している破砕機は粗い米粒が残ります。米粒が多いと豚は食べなかったり、食べても未消化で糞から出てくることも多く、飼料米の配合を農場で行う場合、配合飼料と米が分離してしまい、給餌の方法など、食べさせる為の努力をしました。

- 今までの飼料米の取り組みがなければ3分の2の豚は死んだかもしれません。被害も最小限に抑えることができました。辛い思いをしましたが、震災を通じて「今までやってきたことがよかった」という確証が得ることができました。

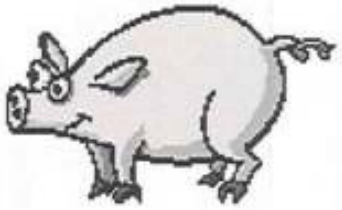
までっこのこめ鶏

国内自給率向上の取組み

までっこのこめ鶏協議会

までっこ鶏の鶏糞堆肥について

- 当初より、までっこ鶏の鶏糞を地域循環の一環として”岩手いわてっこ”などの堆肥としてJA新いわてさんで活用してもらっていました。
- 2007年からは遊休地での飼料米の作付けにも利用していただき、この飼料米については”こめ豚”の飼料として利用してもらいました。



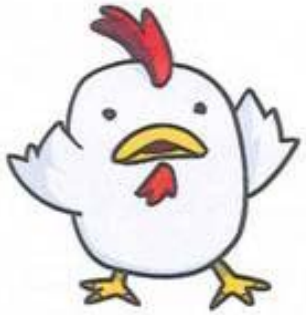
までっこのこめ鶏の経過

- 2008年度にパルシステムさんの耕畜連携会議の中で鶏にも飼料米の利用を呼びかけられて取組を開始しました。
- 2009年2月の出荷の鶏で約8000羽の実験取組を行いました。
- 2009年度に"までっこのこめ鶏協議会"を発足し、2010年度に向けての取組協議を開始しました。

飼料米取組へのテーマ

飼料米による鶏の飼育は、銘柄鶏のように消費者に味のプレミアムを提供するものではない。

飼料米による鶏の飼育は、日本国内の自給率を高め、地球温暖化防止に貢献するための社会運動。

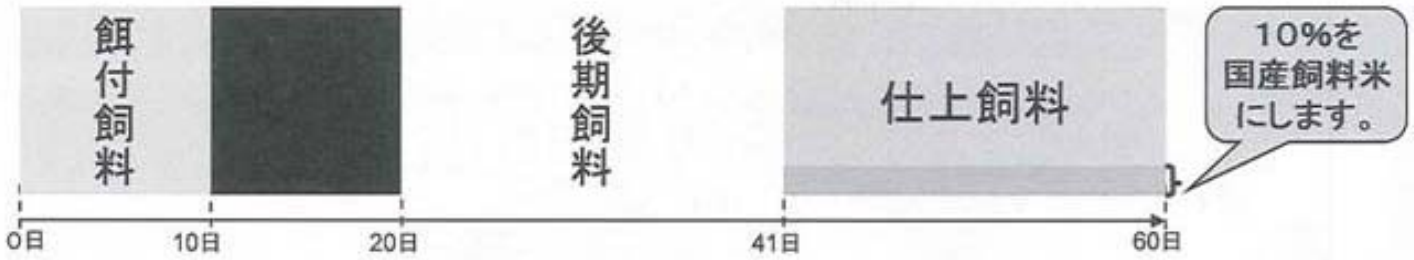


輸入トウモロコシと飼料米の価格

●飼料用に輸入されるトウモロコシの価格は、約30,000円以下／トンです。
●までっこ鶏で活用される飼料米の価格は、約50,000円程度／トンです。

鶏が食べるトウモロコシの全量を飼料米に置き換えた場合には、最終的には鶏肉原料1kg当たりで300円ぐらいのコストアップとなってしまいます。これではいくら意義があっても鶏肉として購入し続けるすることは難しいです。

国内自給率の向上と、Co2削減を鶏肉で持続的に貢献できるためには、組合員様に継続して購入して頂ける価格帯とすることが必要です。このため通常品と比較しても購入できる価格帯とするために、仕上げ飼料の10%を飼料米に置き換えることとしました。



までっこのこめ鶏の飼料米

2009年秋に収穫できた、までっこのこめ鶏に用意した岩手県軽米町の飼料米は、およそ25トンでした。
1反部で飼料米は約500kg取れました。

までっこ鶏1羽が食べる飼料米の量は仕上げ飼料の10%で約280gです。よって今年収穫する飼料米からは約90,000羽の"までっこのこめ鶏"が生産できます。
お肉にした場合には、もも肉唐揚用で約12万パック、ムネ肉で約10万パック分になります。

北岩手の資源循環型農業 イラストマップ

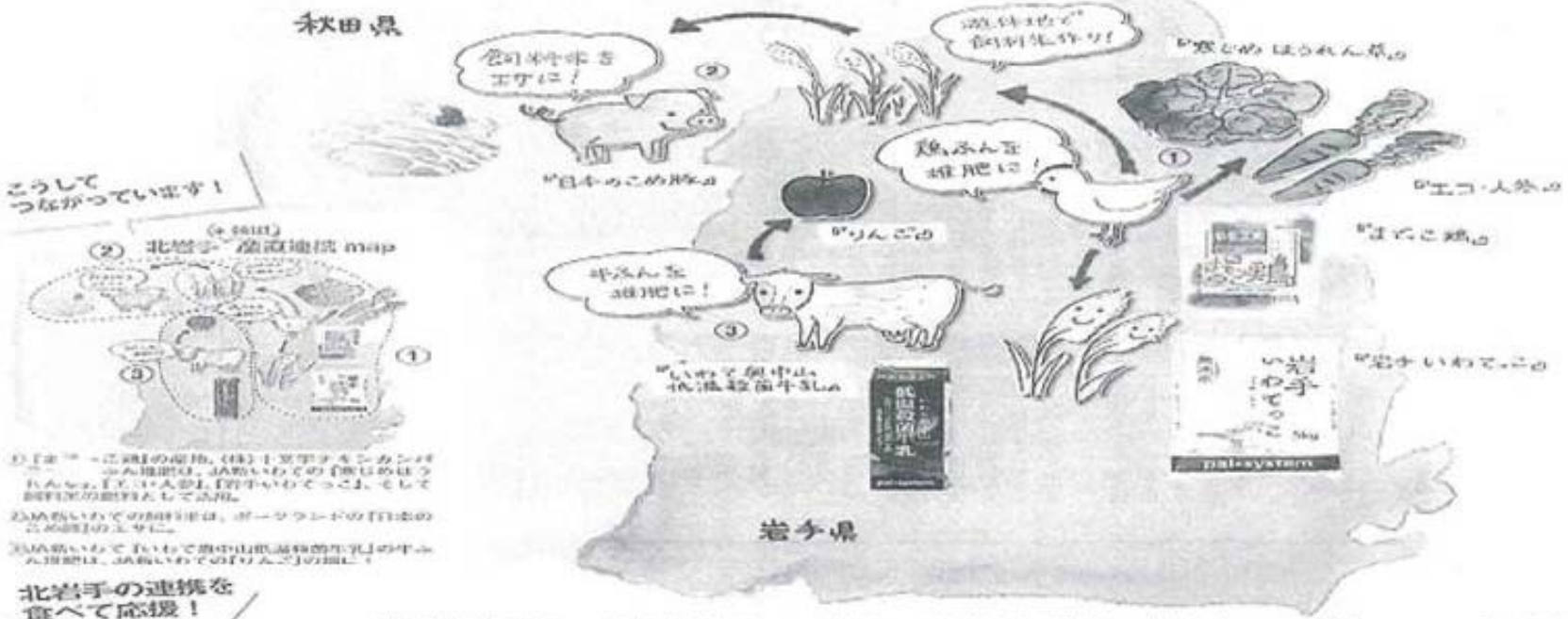
パルシステムでつながる！

鶏 米 牛

秋田県・田沢湖町、奥中山、そして二戸市など。岩手県北部のパルシステム産地では今、話題をまたいだ「資源循環」が進んでいます。おなじみのあの商品と、あの商品がムダなく連携――。そのつながりを、イラストマップでご紹介します。

青森県 ＋秋田 北岩手 産直連携 map

←…飼料米の流れ
←…堆肥の流れ



こうしてつながっています！

①「はくこ鶏」の産地、（株）十文字チキンカンパニーさんは堆肥は、JA新いわてのの「寒じめほうれん草」と、「エコ・人参」、「岩手いわてっこ」、そして飼料米の提供をもらっています。

②JA新いわてのの飼料米は、ポーランドの「日本のこめ豚」のエサに。

③JA新いわて「いわて奥中山低温殺菌牛乳」の牛ふん堆肥は、JA新いわてのの「りんご」の畑に！

北岩手の連携を食べて応援！

カタログによっては支払時が異なります。ご注意ください

305
306

岩手いわてっこ（無洗米）
税1780円（会員1696円）

「パルシステム産直」をきっかけに産地間がより密接に。さらに広げていきたいですね

――JA新いわて 北岩手地区本部 ライスセンター 主任 沢崎実さん

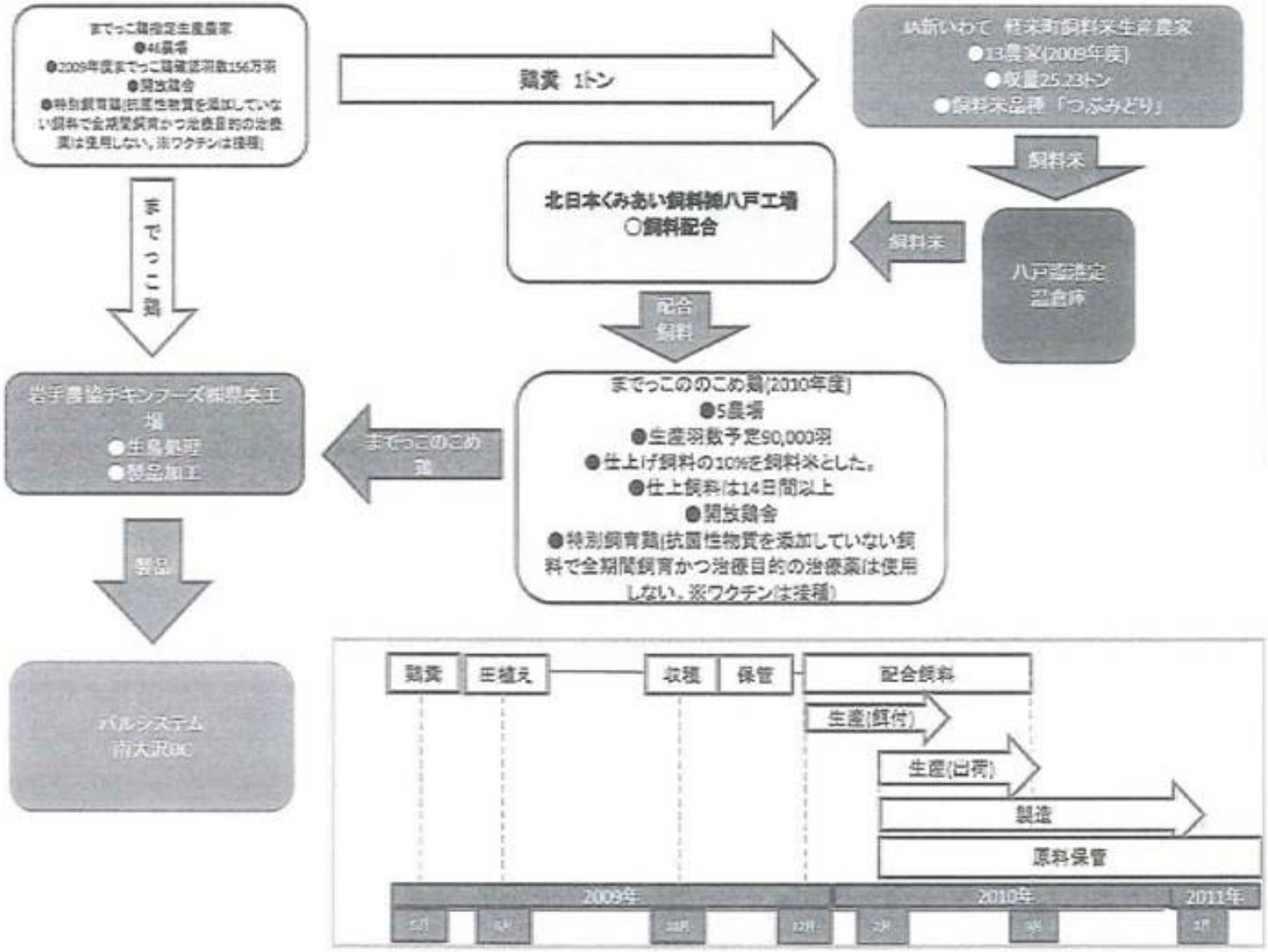
環境保全型の取り組みがつながり実現した「連携連携」

十文字チキンカンパニーさんの鶏ふん堆肥で、JA新いわてで活用され、この取り組みがきっかけで、酪農家から毎年相談をしていた飼料米の提供をもらえることになりました。「これは連携を強固で活用してほしいとの話があった。二者だけでも、パルシステムさんとの取り組みの中で、他の農家に頼らない農産物づくりを進めることもあり、両者の取り組みが合致したんです。

「連携で育まれた岩手の味 ぜひ味わってほしいですね」

「飼料米の取り組みは、かなり先進的なんです。昨年から本格生産を始めていますが、これまで十分消費されず、小豆島などに出荷されていました。今年度は、ほぼ全量が作れる見通しです。「コメ」と「人」をつなぐ農業は、地域ぐるみ、あるいは県をまたぐ連携ができたのは、やはりパルシステムさんの産地があったからこそ。これからもこの強みを活かしていきたい。無洗米や安全な農産物を届けしていきたい。そして消費者の皆さんには、そんな岩手の農産物を、地域ぐるみで味わってほしいですね。

特集：いわて日本酒醸造協同組合連合会


までっこ鶏指定生産農家
●46農場
●2009年度までっこ鶏確認羽数156万羽
●開放鶏舎
●特別飼育鶏(抗菌性物質を添加していない飼料で全期間飼育かつ治療目的の治療薬は使用しない。※ワクチンは接種)
鶏糞 1トン
JA新いわて 軽米町飼料米生産農家
●13農家(2009年度)
●収量25.23トン
●飼料米品種「つぶみどり」
飼料米
八戸港港定温倉庫
飼料米
北日本くみあい飼料㈱八戸工場
○飼料配合
配合飼料
までっこのこの鶏(2010年度)
●5農場
●生産羽数予定90,000羽
●仕上げ飼料の10%を飼料米とした。
●仕上飼料は14日間以上
●開放鶏舎
●特別飼育鶏(抗菌性物質を添加していない飼料で全期間飼育かつ治療目的の治療薬は使用しない。※ワクチンは接種)
までっこのこの鶏
岩手農協チキンフーズ㈱県央工場
●生鳥処理
●製品加工
までっこ鶏
製品
パルシステム
南大沢BC
鶏糞
田植え
収穫
保管
配合飼料
生産(餌付)
生産(出荷)
製造
原料保管
2009年
2010年
2011年